

# 平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

## 1. 学校概要

学校名 名張市立蔵持小学校 (※正式名称を記載)  
種 別  保育園・幼稚園  小学校  小中一貫<sup>※注1</sup>  
 中学校  中高一貫<sup>※注2</sup>  高等学校  
 教員養成大学  専修学校、各種学校  
 特別支援学校  
 その他 (例：小中高一貫 )  
※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒518-0752  
三重県名張市蔵持町原出338番地

E-mail g01\_kura@nabari-mie.ed.jp

Website \_\_\_\_\_

幼児児童生徒数 男子 101名 女子 94名 合計 195名  
幼児・児童・生徒の年齢 7歳～12歳

## 2. 報告期間

平成29年4月～平成30年3月

※報告書提出時点～平成30年3月末までの活動は、予定(見込み)として記載ください。

## 3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要 (800字程度+活動内容を表す写真数枚)

※チェック事項1-1、2-1に対応

本校は平成24年にユネスコスクールに認定され、ESD(持続可能な開発のための教育)の視点を取り入れた学習活動を展開してきた。ESDの概念を取り入れることは、子どもたちに「未来を予測して計画を立てる力」「多面的・総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」などといった問題解決に必要なさまざまな能力・態度を身に付けることにつながるとされている。本校の児童は、自分の考えたことや気持ちを伝えることが苦手な子や、伝えることができても、友だちの思いや考えをしっかりと聞いて受けとめることができにくい子もおり、コミュニケーション能力の育成が課題の一つであると考えられる。また、自分たちで課題を見つけ、多面的・総合的あるいは批判的に課題について考え、さらに深く課題を解決し、行動していこうとする力は、まだ弱いところがある。このようなことから、本校児童の課題を克服するとともに、今日的な教育課題に向かう力を育成するために、生活科・総合的な学習の時間を中心に「自ら課題を見つけ、仲間とともに解決する子の育成」をテーマに、ESDの視点を取り入れた取組を行うことにした。

具体的には、蔵持の人・もの・自然・文化・歴史とのつながりを重視した「地域に根ざした学習」を柱に、①「地域のたからもの探し」の活動、②「百年後の蔵持を守る～米作りを通して～」の活動、③「オーストラリアの友だちへの地域紹介」の活動、④オーストラリアのハンティングデール小学校との交流を行った。

① 「地域のたからもの探し」の活動（3年生）

子どもたちが今まで何気なく歌っていた校歌の中にたくさんの「なぜ？」があることを発見させる。校歌の3番にある“芭蕉は残す 筆のあと” “香ににおえ うに掘る丘の 梅の花” “ああわが蔵持よ 蔵持の梅の花”の歌詞に注目させた。この歌詞から子どもたちはたくさんの疑問をもった。「芭蕉って何？」「うにって何？」「梅の花がどう蔵持と関係しているの？」などの疑問を解決するために、地域の寺に出かけたり、地域の方に出会ったりした。そこで出会った「人・モノ・こと」を子どもたちが出し合い、自分自身の「こだわり」をもって、次への意欲につなげた。

② 「百年後の蔵持を守る～米作りを通して～」の活動（5年生）

米作り体験（田植え、観察、案山子づくり、稲刈り）を通し、米をより身近なものにする。また、海外の交流校の農業の状況との比較をすることにより、自分たちの住む国の食料生産の現状を実感した。

③ 「オーストラリアの友だちへの地域紹介」の活動（6年生）

本年度、本校に来校したオーストラリアハンティングデール小学校の子どもたちに、名張の良さを紹介するためにパンフレット作りに取り組んだ。名張の地域のことを調べる中で、自分たちが知らなかった名張市の魅力を知ったり、名張市に対する知識をより深めたりして、郷土に対する愛着をもつことができた。

④ オーストラリアのハンティングデール小学校との交流（全校）

本校では、子どもたちが広い視野をもつとともに、異文化に対する理解や、異なる文化をもつ人々と協調して生きていく態度を育てることなどを目的に、一昨年度からオーストラリアのメルボルン市にあるハンティングデール小学校と交流している。今年も、10月13日～18日まで、児童24名と教員4名が本校を訪れ、児童はホームステイなどをして交流を深めた。また、本校の児童と一緒に授業を受けるだけでなく、地元の獅子神楽を見たり、忍者体験をしたり、赤目四十八滝を散策したりするなど、名張市の伝統文化と自然に触れる活動を行った。



(2) 活動の詳細

① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

ア. 活動分野 (複数選択可)

<input type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input type="checkbox"/> 3. 防災	<input type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input checked="" type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input checked="" type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input checked="" type="checkbox"/> 10. 食育	<input checked="" type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他( )		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入 )	

ウ. 活動時間 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input type="checkbox"/> 5. その他(自由記述 )	

エ. 使用した教材 (書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名)

--

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

課題を解決するために、「もっと調べたい」「こんな活動を取り入れてはどうだろう」「自分たちが学習したことをもっと地域の人にも知ってもらいたい」など、学習を進めていくにつれて、子どもたちの考えに広がりや深まりが見られた。このような成果があったのも、①「人やものとの積極的な出会い」②「学習ゴールの明確化」③「人やものとの出会い直し」④「学びの足跡、成果の可視化」等の方策を講じた結果であり、子どもたちの視線で教材を開発し、共に学習を創り、練り上げてきた成果であると考え。特に、今回の研究を通して、学ぶ意欲の持続化に有効であると考えられるものを、3点について明らかにすることができた。

1つ目はゴールの明確化である。学習のめざすべきゴールを明確にし、常にそのゴールを意識させること（自分たちは何のために学習しているのか）が大切である。めざすべきゴールが、いかに子どもたちにとって魅力的なものであるかが、学習を進める重要な要素になると考える。

2つ目は地域の方々との出会いである。学習の過程において地域の方々とは幾度か出会うことで、その方々とのつながりが深まり、地域へのさらなる愛着が生まれ、より学びを深めることができたことから、地域の方々との出合わせ方をいかに工夫するかということが、学ぶ意欲を持続させる上で大切であったと考える。

3つ目は学びの足あとの活用である。発表等で自分たちの学びの成果を他者に伝えたり、他者からの反応を感じたりすることで、子どもたちが「何について学んできたのか」を自分自身で再確認することができた。

さらに、ポートフォリオ等でこれまでの学びを振り返り、途切れのない学習を持続するためにも、学びの足あと＝成果物を活用することは大変有効である。

地域に根ざした教材を通して、地域の方から学び、さらには様々な手立てを講じることで、子どもたちはそれぞれの課題を自分の身近にある切実性のあるものとして捉え、学習することができた。

地域に根ざした教材を通して、子どもたちは課題を自分の身近にある「切実性」のあるものとして捉えて学習することができた。特に、身近な課題解決に向けて、ある程度の学習の見通しをもてたときに、子どもたちはさらに意欲的に学習を組み立てようとすることができた。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

調べたことを他者に伝える、収穫した物を食べるといった具体的な学習のゴールを明確にすることで、目的や楽しみをもって活動することができた。また、自分の学びが、他者へ働きかける意味あるものになることを知って、これまで以上に意欲的に学習に取り組めた。さらに、ESDカレンダーの活用により、他教科と関連づけることで、より学びが深まった。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。（200字程度）

※チェック事項 2-2 に対応

学習から得た成果を資料や掲示物など、様々な形で記録し、視覚化することで、学びの振り返りができるとともに、達成感や満足感を味わうことができた。また、自分たちの学びを発信し、他者からの評価やヒントを得ることで、「次はこんなことも調べてみよう」「課題を解決するためにこんな方法はどうだろう」など、子どもたちの主体的な学びの姿が見られ、次への学習の意欲の高まりを感じることができた。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成（地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など）（200字程度）

※チェック事項 2-3 に対応

本年度、近畿ESDコンソーシアムに加盟した。1月27日(土)に奈良教育大学で行われた「ESD 成果発表会」において、本校の活動や取組を発表した。  
また、定期的に本校の授業研究や校内研修会に、奈良教育大学の中澤静男教授に来ていただき、職員の研修を深めている。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成（200字程度）

※チェック事項 2-4 に対応

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）  
※チェック事項 2-5 に対応

(3) 平成 30 年度の活動計画（200～400字程度）

子どもたちにとって、地域は自分たちを成長させてくれる大切な場所である。自分たちとの関連が深く、自分たちで学習を深め、行動化に移しやすい「地域に根ざした学習」に取り組むことで、子どもたちは、「もっと蔵持のことを調べたいな」「どうしたらもっと安全なまちにできるだろうか」「蔵持のいいところをもっと発信したいなあ」など、蔵持地域のよさに気づくとともに、地域を大切に思う心が育ってきている。

また、ESD の視点に立った授業を行うことで、子どもたちは友だちの言ったことに対して建設的に考えたり、一つの課題に対して多面的に考えたりして、未来を見据えた思考が少しずつではあるが、できるようになってきたと感じている。

今回の研究により、私たちは、「子どもたちの学ぶ意欲にいかにか火をつけるか」、また、その「学びの火をいかにか燃やし続けるか」を合い言葉に取り組んできたが、これまでの成果を踏まえつつ、引き続き、この学びの火をこれからも絶やさぬように取り組んでいきたい。